

# 清水寺境内遺跡

宇佐西部（清水）地区集落基盤整備事業に伴う  
発掘調査成果報告書

大分県宇佐市教育委員会

2019



# 清水寺境内遺跡

宇佐西部（清水）地区集落基盤整備事業に伴う

発掘調査成果報告書

大分県宇佐市教育委員会

2019



## 序 文

清水寺境内遺跡は宇佐市大字清水に所在しています。遺跡の西側にある清水寺は養老元(717)年に仁聞菩薩が開基したといわれる古刹で、平安時代末に七堂伽藍が再興されたといわれています。一方で、戦国時代には豊後の太友宗麟による寺院焼き討ちの被害を受けて本堂が消失したことが古文書等に記されています。寛永14(1637)年に本堂が再建されており、現在でも市内外から多くの参拝客が訪れています。

近年、宇佐市内では大規模な圃場整備が各所で行われています。宇佐市教育委員会では事前の確認調査や試掘調査により、埋蔵文化財の記録保存を行っています。その一環として、清水地区集落基盤整備事業に伴う発掘調査を平成28年度に実施しました。

発掘調査では、平安時代末から室町時代にかけての土壙墓や掘立柱建物といった多数の遺構が発見されました。これらの成果は清水寺が再興された後の僧房等の可能性を示しており、当地域の歴史を考える上でも重要な発見といえます。

最後になりましたが、発掘調査と報告書の作成にあたりご指導・ご協力をいただいた関係各位、ならびに地元自治区の皆様に厚く御礼申し上げるとともに、本書が宇佐市の歴史や文化財について学ぶための一助となれば幸いです。

平成31年3月

宇佐市教育委員会

教育長 竹内 新



第1図 清水寺境内遺跡の位置

## 例　言

- 1 本書は、平成 28 年度に宇佐市教育委員会が実施した宇佐西部（清水）地区集落基盤整備事業に伴う清水寺境内遺跡の発掘調査に関する報告書である。
- 2 本遺跡は、大分県宇佐市大字清水 456 番地、同 458 番地に所在する。
- 3 発掘調査及び整理作業は大分県北部振興局と宇佐市で受託契約を締結して実施した。
- 4 調査費用は、受益者負担相当額を市内遺跡発掘調査事業として国庫及び大分県の補助を受けて宇佐市が負担し、その他は集落基盤整備事業として国庫補助を受けて大分県が負担した。
- 5 発掘調査は弘中正芳と栗原眞が担当した。
- 6 出土遺物の実測及び製図・写真撮影・遺構実測図の製図は平成 30 年度に株式会社イビソク大分支店に委託した。
- 7 挿図・表・図版等における調査トレンチの標記方法として TR と英数字を使用した。また、遺構の標記方法は『発掘調査のてびき』（文化庁文化財記念物課）に従った。
- 8 本書に使用した方位は座標北であり、座標値は平面直角座標系第 2 系に準拠した。挿図に使用したレベル高はすべて海拔絶対高である。土層及び土器の色調は『新版標準土色帖』に準拠した。
- 9 遺物番号は本文・挿図・図版で一致する。
- 10 本書の執筆及び編集は弘中が行った。

## 本文目次

第1章 調査経過 ······	1
第1節 調査に至る経緯 ······	1
第2節 調査の組織 ······	1
第2章 位置と環境 ······	3
第1節 遺跡の立地 ······	3
第2節 歴史的環境 ······	3
第3章 調査の成果 ······	5
第1節 基本層序 ······	5
第2節 試掘調査の成果 ······	5
第3節 本調査の成果 ······	6
第4章 まとめ ······	23
第1節 調査の成果 ······	23
第2節 遺構の分布 ······	23
第3節 出土遺物の検討 ······	23
第4節 遺跡の年代と特徴 ······	25

## 表目次

第1表 清水地区試掘調査 調査区一覧 ······	5
第2表 清水寺境内遺跡 出土土器観察表 ······	18
第3表 清水寺境内遺跡 出土陶磁器観察表 ······	21
第4表 清水寺境内遺跡 出土石製品観察表 ······	22
第5表 清水寺境内遺跡 出土金属器観察表 ······	22
第6表 清水寺境内遺跡 出土土師器の口径と器高の比率分布及び一覧 ······	24
第7表 清水寺境内遺跡 各時期の遺構 ······	25

## 挿 図 目 次

第1図 清水寺境内遺跡の位置	( i )
第2図 清水寺境内遺跡 調査区配置図	2
第3図 清水寺境内遺跡とその周辺の遺跡	3
第4図 清水寺境内遺跡 遺構配置図	4
第5図 清水寺境内遺跡の基本層序	5
第6図 ST22 遺構実測図、出土遺物実測図	6
第7図 ST23 遺構実測図、出土遺物実測図	7
第8図 SB229、SA232、SA233、SA234 遺構実測図、出土遺物実測図	8
第9図 SB130 遺構実測図	9
第10図 SB231 遺構実測図、出土遺物実測図	10
第11図 SD20 出土遺物実測図	10
第12図 SE150 遺構実測図、出土遺物実測図	11
第13図 SK31 遺構実測図、出土遺物実測図	11
第14図 SK71、SP73、SP74 遺構実測図、出土遺物実測図	12
第15図 SD20、SK133 遺構実測図、SK133 出土遺物実測図	13
第16図 柱穴 出土遺物実測図	16
第17図 調査区内出土遺物実測図	16
第18図 東播系須恵器の比較	24

## 図 版 目 次

PL. 1 清水寺境内遺跡 調査区西側 遺構検出状況	
清水寺境内遺跡 調査区東側 遺構検出状況	
PL. 2 清水寺境内遺跡 調査区西側 完掘状況	
清水寺境内遺跡 調査区東側 完掘状況	
PL. 3 清水地区試掘調査 1TR 完掘状況	
清水地区試掘調査 6TR 完掘状況	
清水地区試掘調査 7TR 完掘状況	
清水地区試掘調査 8TR 完掘状況	
清水地区試掘調査 9TR 完掘状況	
清水地区試掘調査 13TR 完掘状況	
清水地区試掘調査 16TR 完掘状況	
清水地区試掘調査 19TR 完掘状況	

PL. 4 ST22 遺構検出状況  
ST22 遺物出土状況 全景  
ST22 遺物出土状況 近接  
ST22 土層断面  
ST23 遺構検出状況  
ST23 遺物出土状況 全景  
ST23 遺物出土状況 近接  
ST23 完掘状況

PL. 5 SE150 遺構検出状況  
SE150 半裁状況  
SE150 土層断面  
SE150、SB230 完掘状況  
SA232 検出状況  
SP98 遺物出土状況  
SB229、他 完掘状況  
SD20 完掘状況

PL. 6 SK31 遺構検出状況  
SK31 完掘状況  
SK71 SP74 遺物出土状況  
SK71 遺物出土状況 全景  
SK71 遺物出土状況 近接  
SP73、SP74 遺物出土状況  
SP73 遺物出土状況  
SP74 遺物出土状況

PL. 7 出土遺物写真

PL. 8 出土遺物写真

PL. 9 出土遺物写真

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

近年、宇佐市内において集落基盤整備事業として大規模圃場整備が継続的に実施されている。平成28年度に、宇佐西部（清水）地区集落基盤整備事業が行われることとなった。周知の埋蔵文化財包蔵地外ではあったが、工事面積は約13haと広大であったため、宇佐市教育委員会社会教育課（以下、宇佐市教委）と大分県北部振興局農林基盤部（以下、農林基盤部）とで協議し、試掘調査を実施することになった。

平成28年10月14日から試掘調査を実施した。試掘調査では19箇所の調査区を設置し（第2図）、その結果、第7トレンチと第8トレンチにおいて柱穴や土坑が確認されたため、本調査を実施することになった。

なお、上述のとおり周知の埋蔵文化財包蔵地外であったため、同年12月1日付で大分県教育委員会（以下、県教委）宛に、文化財保護法第97条第1項に基づく通知を行い、遺跡地図へ登録した。

宇佐市教委と農林基盤部とで協議を行い、受託契約を同年12月7日付けて締結し、同月9日より本調査に着手した。調査期間は平成28年12月9日から平成29年1月17日であるが、平成28年12月26日から翌年1月5日までは天候不良や年末年始休業のため調査を中止した。なお、埋蔵文化財発見届を平成29年1月24日に宇佐警察署に提出し、同年2月14日付で埋蔵文化財としての認定を受けた。

出土遺物の整理については、平成30年度に実施した。平成30年9月28日付で宇佐市と大分県北部振興局で整理業務の受託契約を締結した。なお、出土遺物の実測及び製図、遺物写真撮影、遺構実測図の製図については、株式会社イビソク大分営業所に委託した。

### 第2節 調査の組織

#### 調査組織

##### 発掘調査（平成28年度）

委託者：大分県北部振興局 局長 小野洋介

受託者：宇佐市長 是永修治

調査主体：宇佐市教育委員会

教育長 近藤一誠

教育次長 高月晴彦

社会教育課 課長 佐藤良二郎

同課文化財係 主幹（総括）江藤和幸

副主幹 山中千織、技師 弘中正芳、主事 竹村雄太

非常勤職員 山田史華（平成28年12月28日まで）、臨時職員 栗原眞

発掘作業員 阿部恵子、井上三恵子、上田和幸、内村たか子、加來晴美、酒井久美子、末廣洋子、西佳治、宮久修身、宮久君子

##### 整理作業（平成30年度）

委託者：大分県北部振興局 局長 安倍欣司

受託者：宇佐市長 是永修治

整理主体：宇佐市教育委員会

教育長 竹内新

教育次長 若山雅敏（平成30年12月31日まで）、

佐藤良二郎（平成31年1月1日から社会教育課長と兼務）

社会教育課 課長 佐藤良二郎

同課文化財係 課長補佐（総括）川谷浩

主幹 矢野貴晃、主任 弘中正芳、主事 中野秀俊

技師 甲斐安寿生、矢部翔平

整理作業員 井上三恵子、内村たか子、酒井久美子、西幸子

整理作業委託 株式会社イビソク大分営業所



第2図 清水寺境内遺跡 調査区配置図(試掘調査含む)

## 第2章 位置と環境

### 第1節 遺跡の立地

清水寺境内遺跡（以下、本遺跡）が所在する宇佐市清水は、宇佐市と中津市の境にあたる犬丸川東側に伸びる丘陵の端部に位置している。丘陵の端部が分岐して谷を形成しており、遺跡の東側の谷部は現在でも居住域として利用されている。一方で、丘陵の端部からは緩やかな傾斜が続く平野部が伸びており、水田として広く利用されている。

### 第2節 歴史的環境（第1図、第3図）

本遺跡の周辺では、弥生時代以前の遺跡は現状では確認されていない。古墳時代後期になると、遺跡の南側には上山田横穴墓群が、北西側には野依・伊藤田窯跡群を中心とする須恵器窯が築かれる。

本遺跡の近隣で古代に属する遺跡は現状では未確認である。しかしながら、遺跡西側に所在する補陀落山清水寺は、養老元（717）年に仁門菩薩が開基したとされていることから、この時期にも近隣に集落遺跡等があった可能性は高い。

中世になると本遺跡から谷を隔てた南東側の丘陵に中世山城である清水村山遺跡が築かれる。一方で、治承4（1181）年に小松内府重盛の命により清水寺の七堂伽藍が整えられるなど、寺院が再建されたことが縁起に記されている。

15世紀後半には、豊後を統治した大友宗麟によって行われた社寺等への焼き討ちの被害を受け、清水寺も焼失した。

近世になると、寛永14（1637）年から日出藩主であった木下宗連らの発起により清水寺が再建されており、現在残る本堂等は江戸時代に建立されたものである。

上記の様に、本遺跡の周辺では古墳時代以降で断続的に遺跡が形成されていることが伺える。



第3図 清水寺境内遺跡とその周辺の遺跡 (S=1/25000、大分県遺跡地図 2018 より抜粋、一部追記)

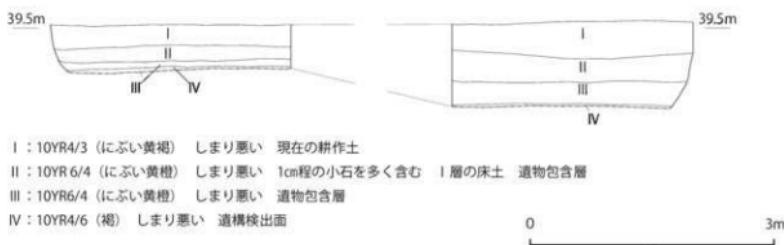
第4図 清水寺境内遺跡 遺構配置図 ( $S=1/200$ )



## 第3章 調査の成果

### 第1節 基本層序

本遺跡の基本層序は、本調査区の西壁の南北端付近でそれぞれ精査を行った。各土層の特徴は第5図に記す。



第5図 清水寺境内遺跡の基本層序（調査区西壁、S=1/60）

### 第2節 試掘調査の成果

試掘調査では19箇所のトレーンチを設定した（第2図）。その結果、遺構が検出された第7、第8トレーンチを含む範囲を清水寺境内遺跡として本調査を実施した。  
各トレーンチにおける調査結果は、第1表のとおりである。

第1表 清水地区試掘調査 調査区一覧

調査区名	幅×長さ	遺構	遺物	備考
1 トレーンチ	1 m × 15 m	—	—	
2 トレーンチ	1 m × 15 m	—	—	
3 トレーンチ	1 m × 10 m	—	—	
4 トレーンチ	1 m × 10 m	—	須恵器片	
5 トレーンチ	1 m × 10 m	—	—	
6 トレーンチ	1 m × 20 m	—	—	
7 トレーンチ	1 m × 15 m	溝、柱穴	土師器、瓦器	本調査実施
8 トレーンチ	1 m × 10 m	柱穴	土師器、瓦器	本調査実施
9 トレーンチ	1 m × 12 m	—	—	
10 トレーンチ	1 m × 21 m	—	—	
11 トレーンチ	1 m × 17 m	—	—	
12 トレーンチ	1.3 m × 12 m	—	—	
13 トレーンチ	1.3 m × 25 m	—	—	
14 トレーンチ	1.3 m × 20 m	—	—	
15 トレーンチ	1.3 m × 25 m	—	—	
16 トレーンチ	1.3 m × 8.6 m	—	土器片、陶磁器片	
17 トレーンチ	1.3 m × 10 m	—	—	
18 トレーンチ	1.3 m × 10 m	—	—	
19 トレーンチ	1.3 m × 10 m	—	—	

### 第3節 本調査の成果

本調査では、中世の土壙墓2基、井戸2基、溝1条、土坑6基の他、柱穴を200基以上検出した。遺構のナンバリングはすべての遺構を連番で行っているため、同一種類の遺構でも番号が連続しない。なお、掘立柱建物と柵に関しては調査期間内での同定が困難であったため、整理作業時に検討を行った。遺構番号は連番で付与した。以下では、特徴的な遺構等について記す。

#### 【墓】

##### ST22（第6図）

調査区西壁から約1m東で検出した中世の土壙墓である。幅0.95m、長さ1.45mの梢円形であり、深さ15cm程が残存していた。主軸はN38°Wである。内部からは鉄刀1振と瓦器椀等が出土した。

1は鉄刀である。墓壙の南側で出土した。大部分が欠損していたが、埋土に付着した鉄の範囲から全長約67cm、刀身幅約4~5cmであったことが推察される。なお、劣化が著しく、実測が不可能であったため写真のみ撮影した。

2は瓦器椀である。墓壙の北側で出土した。口縁部径（以下、口径）16.0cm、底部径（以下、底径）5.0cm（復元）、器高6.0cmで、高さ5mm程の高台が貼付けられている。調整は口縁部外面にヨコナデ、体部外外面に弱いミガキが施されている。

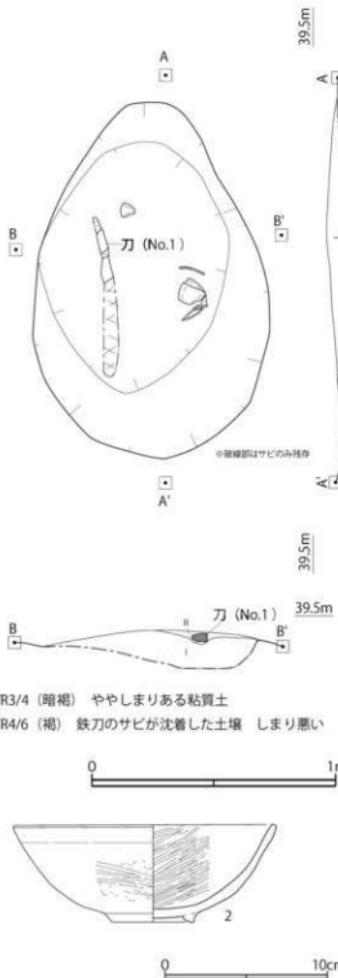
##### ST23（第7図）

ST22の南約6mの位置で検出した中世の土壙墓である。幅0.83m、長さ1.56mの隅丸方形状であり、深さ約15cmが残存していた。主軸はN48°Wである。墓壙の西側から白磁椀1点と土師皿4点が重なった状態で出土した。

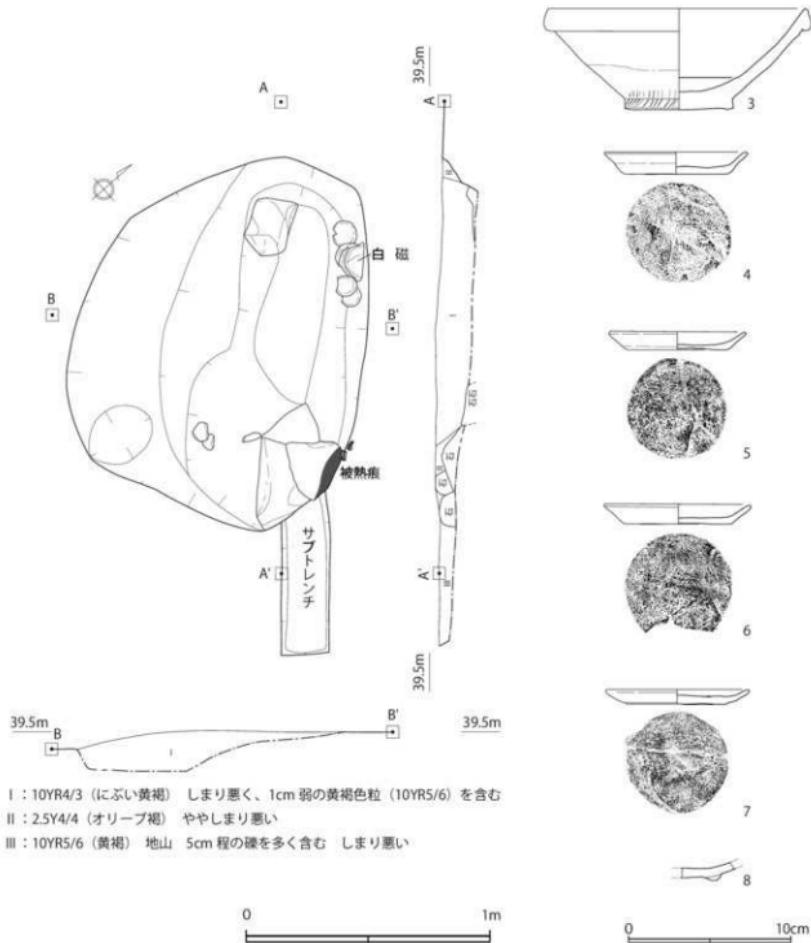
3は玉縁口縁を有する白磁IV類<sup>(註1)</sup>の椀である。墓壙の東側で出土した。口径15.8cm、底径6.7cm、器高6.2cmである。内面及び外面の上半部に施釉されており、高台及び胴部下位にトビガンナ状の工具痕が認められる。

4~7は土師器の小皿である。4は復元口径8.8cm、底径6.5cm、器高1.35cm。内面及び外面に回転ナデが施されており、底面に回転糸切痕が残る。5は口径8.2cm、底径6.1cm、器高1.2cmであり、底面に糸切痕が残る。6は口径9.0cm、底径6.5cm、器高1.3cmであり、底面には糸切痕の上から板状圧痕が残る。7は口径8.8cm、底径6.1cm、器高0.9cmであり、底面に糸切痕が残る。

8は瓦器椀の底部片である。小片のため底径等の復元はできなかった。底部に高さ4mm程の高台が貼付けられており、内外面にナデが施されている。



第6図 ST22 遺構実測図(S=1/20)、出土遺物実測図(S=1/3)<sub>6</sub>



第7図 ST23 遺構実測図 ( $S = 1/20$ )、出土遺物実測図 ( $S=1/3$ )

### 【掘立柱建物】

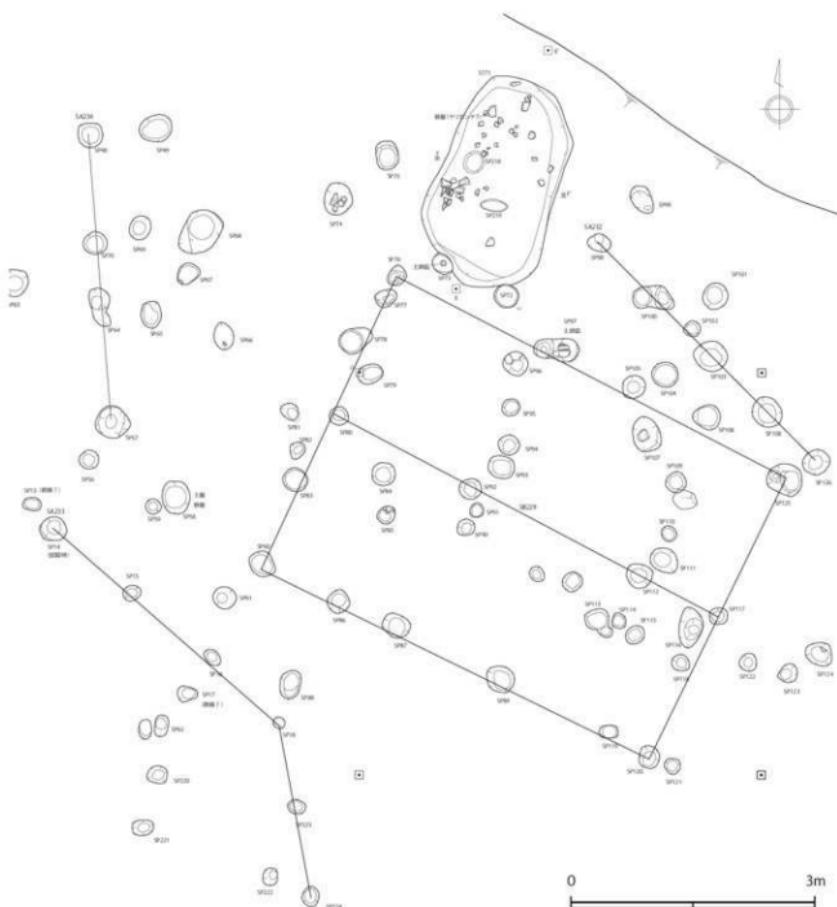
#### SB229 (第8図)

調査区の北側中央付近で検出した中世の掘立柱建物である。SP60、SP76、SP80、SP87、SP89、SP97、SP105、SP117、SP120、SP125で構成され、柱間は桁行 5.5 m (3間)、梁間 4.0 m (2間) の側柱建物と推定した。なお、SP80とSP117を結ぶ直線状にSP92とSP112が位置しており、棟持柱の可能性も考えられる。

SP60は、直径約40cmである。遺物は出土しなかった。

SP76は直径24cm、深さ約17cmが残存する。内部から瓦器片が出土したが小片のため実測等はできなかった。

SP80は直径約25cmである。遺物は出土しなかった。



SB229 (共に SP97 )



SA232



SA234



0 10cm

第8図 SB229、SA232、SA233、SA234 遺構実測図 ( $S = 1/60$ )、出土遺物実測図 ( $S = 1/3$ )

SP87 は直径約 35cm である。遺物は出土しなかった。

SP89は直径35cmである。遺物は出土しなかった。

SP97は直径約25cmの小穴2基が切りあっており、最大部で深さ約32cmが残存する。内部から土師器の杯が2点出土した。

9と10は土師器の杯である。9は復元口径 16.0cm、復元底径 12.4cm、器高 2.4cm である。内外面にナデが施されており、底面には回転糸切痕が残る。10は小片のため口径等の復元はできなかつた。器高は 2.3cm である。内外面にヨコナデが施されており、底面にわずかながら回転糸切痕が残る。

SP105は直径約30cm、深さ約41cmが残存する。遺物は出土しなかった。

SP116は直径約23cm、深さ約11cmで残存する。

SP111は直径約25cmで、遺物は出土しなかった。

SP125は直径約40cmである。内部から土器片が出土したが小片であり実測等はできなかった。

SP123は直径約40cmである。内掃がうち土器片がSP92は直径約37cmで、遺物は出土しなかった。

SP112は直徑約33cmである。内部から土器顆粒が出土したが小片であり実測等はできなかつた。

### SB230 (第9図)

調査区の北東側で検出した中世の掘立柱建物である。SP183、SP188、SP193、SP206で構成され、柱間は東西2.2m(1間)、南北の1.9m(1間)の建物である。SE150を囲うように配置されており、井戸の覆屋の可能性もある。柱穴から瓦器の胴部片等がした。

SP183は直径31cm、深さ約16cmが残存する。内部から瓦器の胸部と思われる土器片が出土したが、小片であり実測することができなかつた。なお、出土した瓦器片は外面に指頭圧痕が残されており、ミガキ等は確認できなかつた。

SP188は直径約30cmであり、遺物は出土しなかった。

SP193は直徑約28cm、深さ約29cmが残存する。遺物は出土しなかった。

SP206は直径約29cmであり、遺物は出土しなかった。

### SB231 (第10図)

調査区の東側で検出した中世の掘立柱建物である。SP148、SP149、SP151、SP158で構成され、柱間は桁行3.0m(1間)、梁間1.6m(1間)の建物である。柱穴から土師器等が出土した。

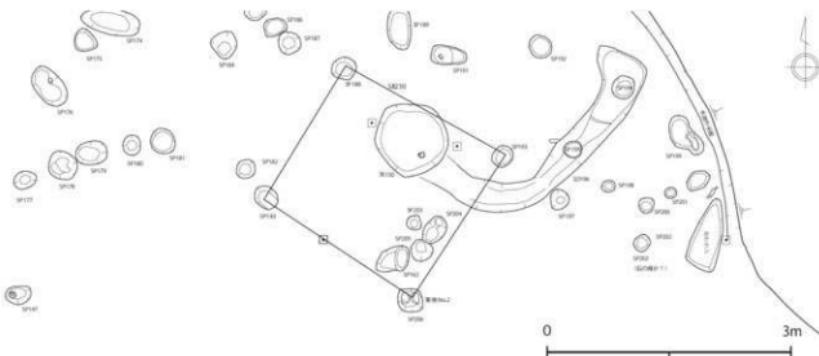
SP148 は直径約 27cm、深さ約 10cm が残存する。内部から土師器の杯等が出土した。

11は土師器の杯である。復元口径10.6cm、復元底径7.4cm、器高1.9cmである。内外面に回転ナデが施されており、底面には回転糸切の後に板状圧痕が残る。

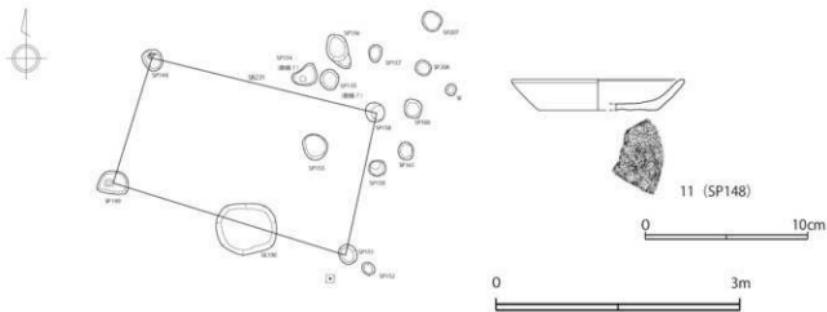
SP149は直径約46cm、深さ約12cmが残存する。遺物は出土しなかった。

SP151は直径約25cm、深さ約14cmが残存する。遺物は出土しなかった。

SP157 は直径約 23cm、深さ約 14cm が残存する。遺物は出土しなかった。



第9図 SB230 遺構案測図 ( $S = 1/60$ )



第10図 SB231 遺構実測図 ( $S = 1/60$ )、出土遺物実測図 ( $S=1/3$ )

### 【井戸】

#### SE150 (第12図)

調査区の東側北端付近で検出した、中世の井戸である。上端部の直径 1.75 m であり、湧水による崩落の危険性もあったため深さ 1.9 m までで掘り下げを中止した。内部からは瓦器椀や土師皿等が出土した。

12は井戸の検出面で出土した土師器の小皿である。口径 7.2cm、底径 5.8cm、器高 1.0cm である。内外面に回転ナデが施されており、底面には回転糸切の後に着いた板状圧痕が残る。

13は東播系須恵器鉢の口縁部片である。I 層から出土した。小片のため口径復元はできなかった。内外面に回転ナデが施されている。

14は滑石製石製品である。I 層から出土した。残存部の最大長 3.6cm、同最大幅 3.8cm、厚さ 1.4cm である。上面に円弧状の凹面があり、上端部と側面に幅 2mm から 3mm 程の工具痕が残る。小片であるため器種の特定はできなかったが、二次利用品と考えられる。

15と16は瓦器椀である。15はⅢ層から出土した。口径 16.1cm、底径 7.0cm、器高（平均）6.0cm で、高さ 3mm 程の貼付高台がつけられている。内外面の上半部は横ナデ、下半部には指オサエ後にナデが施され、内面下半部にはナデ痕が残る。16は出土層位を記録していない。復元口径 14.8cm、底径 4.6cm、器高 5.3cm で、高さ 3mm 程の低い高台が貼り付けられている。胴部外面上半に指オサエ、下半に指オサエの後に弱いミガキ、内面にはナデ、底面にはミガキが施されている。

17は土師器の小皿である。Ⅲ層から出土した。小片のため口径及び底径は復元できなかった。器高は 1.2cm である。内外面に回転ナデが施されており、底面には回転糸切後の板状圧痕が残っている。

### 【溝】

#### SD20 (第11図、第15図)

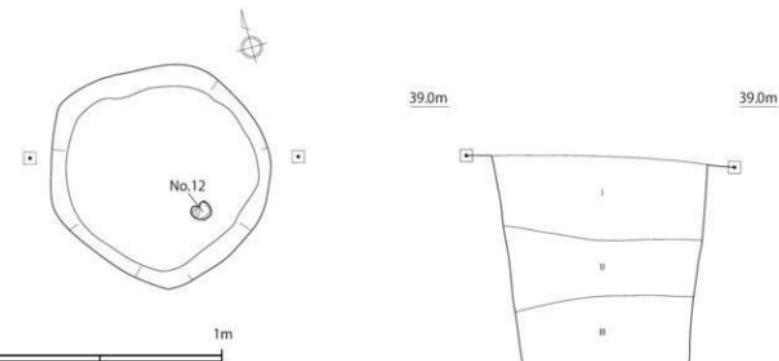
調査区北側中央部付近で検出した溝である。幅 0.7 ~ 0.8 m、深さは 5~10cm 程が残存していた。底面に拳大の円礫が広がっている。内部からは土師器や鉄器等が出土した。

18は陶磁器の底部である。試掘調査の際に出土した。復元底径 5.5cm で、高台が一部残存する。底部を除く内外面に施釉されている。

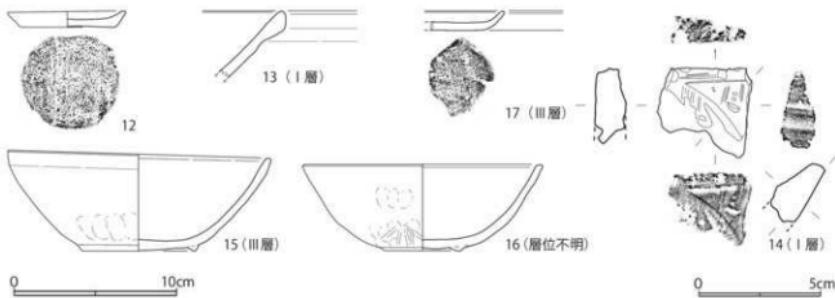
19は鉄器である。残存長 5.2cm、残存幅 2.7cm である。全面が鎌に覆われており器種の同定は困難であるが、上部に直径 1cm 程の凹みがありヤリガンナ等の小型工具の可能性もある。



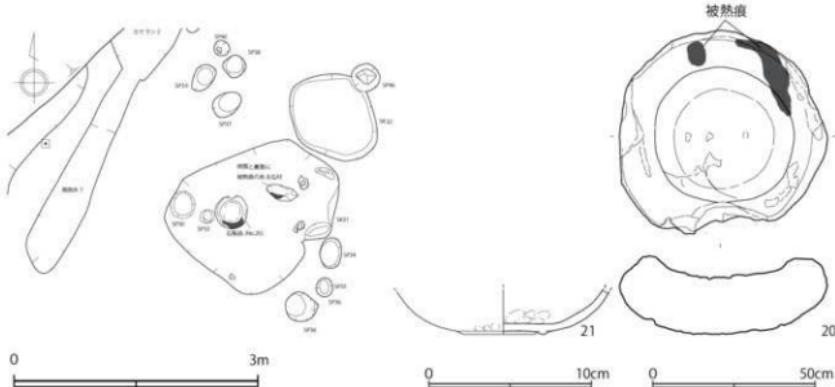
第11図 SD20 出土遺物実測図 (陶磁器:  $S=1/3$ 、鉄器:  $S=1/2$ )



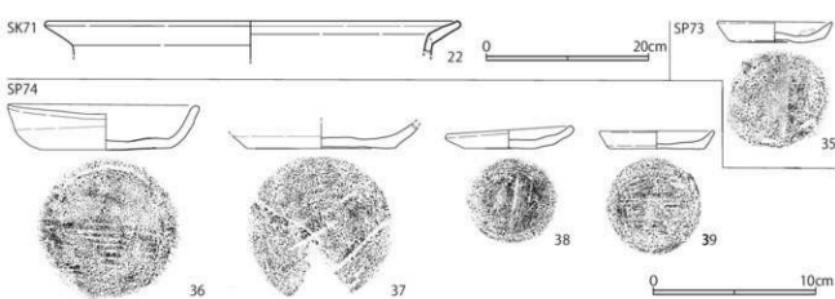
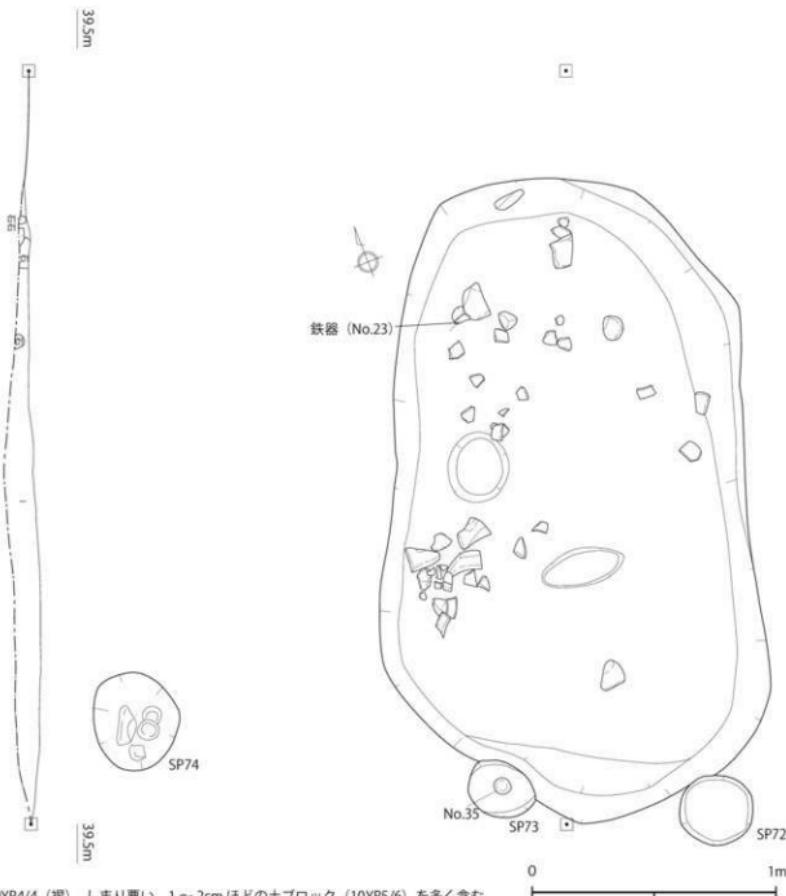
I : 10YR2/3 (黒褐) ややしまりある粘質土 最上位から土師皿出土  
 II : 10YR3/3 (暗褐) しまりある粘質土 1m以下の砂粒を含む  
 III : 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりの強い粘質土 数cm程の黄褐色のブロックを少し含む



第12図 SE150 遺構実測図 ( $S = 1/20$ )、出土遺物実測図（土器： $S=1/3$ 、石製品： $S=1/2$ ）



第13図 SK31 遺構実測図 ( $S = 1/60$ )、出土遺物実測図 (土器:  $S=1/3$ 、石製品:  $S=1/10$ )



第14図 SK71、SP73、SP74 遺構実測図 ( $S = 1/20$ )、出土遺物実測図 (22のみ  $S = 1/6$ 、他は  $S = 1/3$ )

## 【土坑】

### SK31 (第13図)

調査区の北西側で検出した。東西2.1m、南北1.8mの不定形土坑であり、内部からは安山岩製の石製品や瓦器等が出土した。

20は角閃石を多く含む安山岩製の石製品で土坑の中央部付近で遺構検出時に浮いた状態で出土した。最大径42.5cm、厚さ16.5cmであり、中央部に凹みがある。一部に被熱痕が認められる。つくばいや手水鉢に使用した石材の可能性もあるが、前述のとおり原位置を保っていない可能性が高く、詳細は不明である。

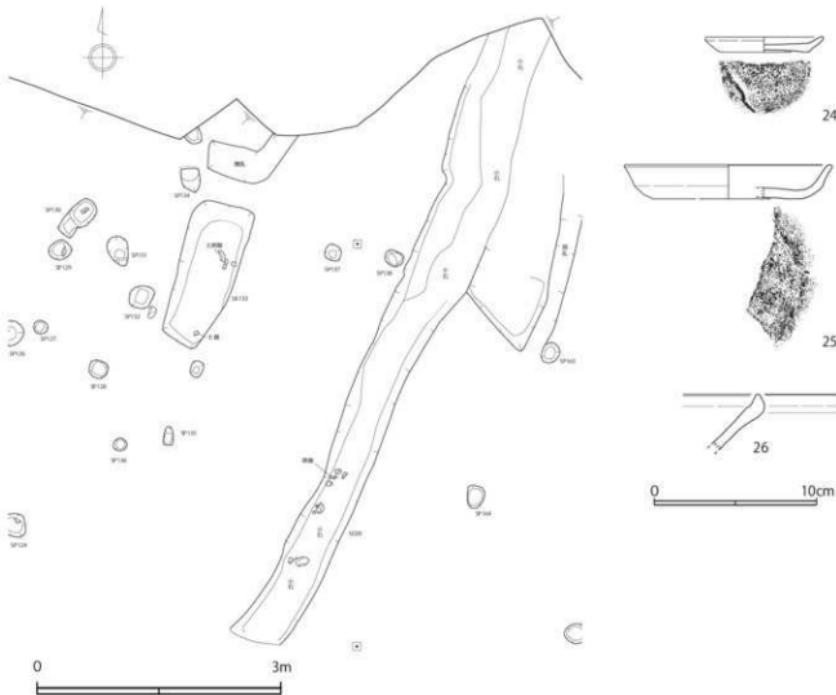
21は瓦器碗である。底径5.0cmであり、高さ2mm程の低い高台が貼付られている。器表が摩耗しており調整は不明瞭であるが、外面にナデと指オサエ、内面には指オサエ後のナデ痕がわずかに残る。

### SK71 (第14図)

SB229の北側約0.5mの位置で検出した土壌である。東西約1.4m、南北約2.7mの楕円形状で、最深部で約12cmが残存していた。内部からは土師質の鍋や瓦器等が出土した。なお、調査時は土壌墓の可能性を考慮してST71としていたが、出土遺物等から墓とは考えにくいためSK71として新たに遺構番号を設定した。

22は土師質の鍋の口縁部である。復元口径51.0cmで、内外面にナデ痕が残っている。

23は鉄器である。残存長6.1cm、残存幅2.5cm、残存厚1.0cm。鋸や剥離による劣化が著しく、実測できなかった。器種の同定は困難であるが、鍛造品であり上部は刃状を呈している。ヤリガシナ等の小型工具か。



第15図 SD20、SK133 遺構実測図 ( $S=1/60$ )、SK133 出土遺物実測図 ( $S=1/3$ )

### SK133（第15図）

調査区の北側中央付近で検出した。東西0.6～0.7m、南北1.8mの隅丸方形状の土坑である。内部からは瓦器等が出土した。

24は土師器の小皿である。口径7.2cm、底径5.6cm、器高0.9cmである。内外面に回転ナデが施されており、底面には回転糸切痕が残る。

25は土師器の杯である。復元口径12.8cm、復元底径9.2cm、器高2.0cmである。内外面に回転ナデが施されており、底面には回転糸切痕が残る。

26は東播系須恵器鉢の口縁部である。小片であり口径復元はできなかった。内外面に回転ナデが施されている。

### 【柵、柱穴群】

#### SA232（第8図）

調査区の北側中央付近で検出した柱穴群であり、SB229と隣接している。SP98、SP100、SP103、SP108、SP126が0.9mから1.0m間隔で柱穴が一列に並んでおり、検出長は約3.8mである。SA233の一部とほぼ平行する様に並んでおり、柵の可能性がある。

SP98は直径約29cm、深さ約10cmが残存していた。内部から瓦器皿の完形品が出土した。

27は瓦器の皿である。口径11.4cm、底径5.2cm、器高2.4cmで、底部に高さ4mm程の高台が貼り付けられている。内外面にナデが施されている。SP103とSP108からも土器が出土したが、いずれも小片であり詳細は不明であった。

SP100は直径20cmから25cmの小穴が隣接しており、最深部で約16cmが残存していた。遺物は出土しなかった。

SP103は直径約42cm、深さ約54cmが残存していた。土師皿や須恵器が出土したが、いずれも小片であり実測はできなかった。

SP108は直径約47cmで、内部から土師器の小片が出土した。遺物は実測できなかった。

SP126は直径約45cmで、遺物は出土しなかった。

#### SA233（第8図）

SB229の南西約1.5mの位置で検出した柱穴群であり、SP14、SP15、SP16、SP18、SP223、SP224で構成されている。SP14からSP18までは長さ約3.7mであり、SA232とほぼ平行する様に並んでいることから柵の可能性も考えられる。いずれの柱穴からも遺物は出土しなかった。

#### SA234（第8図）

SB229の西側約2.5mの位置で検出した柱穴群であり、SP48、SP64、SP70、SP57で構成されている。SP48からSP57までの長さが約3.6mであり、0.8mから1.2m間隔で柱穴が一列に並んでいる。

SP48は直径30cmであり、内部から土師器の杯等が出土した。28は土師器の杯である。口縁部を欠損しており、復元底径7.8cmを測る。内外面に回転ナデ、底面に回転糸切後の板状圧痕が残っている。

SP57は直径約44cmであり、内部から土師器の小皿が出土した。29は復元口径6.8cm、復元底径4.8cm、器高0.9cmである。内外面に回転ナデ、底面に回転糸切痕が残る。

SP64は直径約27cmであり、内部から土師器の小皿が出土した。30は復元口径7.6cm、底径5.4cm、器高1.2cmである。内外面に回転ナデ、底面に回転糸切後の板状圧痕が残る。

SP70は直径約30cmであり、遺物は出土しなかった。

### 【柱穴】

#### SP41

調査区の北西隅付近で検出した長径約52cm、短径23cm程の楕円形状の穴である。内部から土師器の小皿が出土している。31は復元口径7.6cm、復元底径6.0cm、器高1.3cmである。内外面に回転ナデ、底面に回転糸切痕が残る。

#### SP55

調査区の北西側で検出した。直径約24cmの柱穴である。内部から土師器の杯が出土している。

32は復元口径12.5cm、復元底径9.2cm、器高2.3cmである。内外面に回転ナデ、底面に回転糸切後の板状圧痕が残る。

#### SP58（第16図）

SB229の西側約1.2mで検出した。直径約35cmで、内部から鉄釘と土師器の杯が出土している。

33は鉄釘である。残存長4.1cm、残存幅0.4cmである。外面の大部分が鋸で覆われているが、端部でわずかに形状が確認できる。断面方形を呈しており、上部幅0.5cm、下部幅0.3cmである。

34は土師器の杯で、復元口径11.8cm、復元底径8.0cm、器高2.6cmである。風化により器表面が荒れているが、内外面に回転ナデ、底面に回転糸切痕が残る。

#### SP73（第14図）

SK71の南東端で検出した柱穴である。直径約28cmであり、内部から土師器小皿の完形品が出土している。35は口径6.9cm、底径4.2cm、器高1.3cmである。内外面に回転ナデが施されており、底面には回転糸切後の板状圧痕が残っている。底面を切り離した後の押圧により、底部が大きく変形している。

#### SP74（第14図）

SK71の西側約1mの位置で検出した柱穴である。直径約25cm、深さ約17cmが残存していた。内部からは、土師器の杯2点と小皿2点の完形品が出土している。

36と37は土師器の杯である。36は口径11.8cm、底径8.0cm、器高2.5cmである。内外面に回転ナデが施されており、底面に回転糸切後の板状圧痕が残っている。37は底径9.0cmである。内外面に回転ナデが施されており、底面に回転糸切後の板状圧痕が残っている。

38と39は土師器の小皿である。38は口径7.8cm、底径5.5cm、器高1.1cmである。内外面に回転ナデが施されており、底面に回転糸切後の板状圧痕が残っている。39は口径7.1cm、底径5.9cm、器高1.1cmである。内外面に回転ナデが施されており、底面に回転糸切後の板状圧痕が残っている。

#### SP77（第16図）

SP76の南側に隣接する柱穴である。直径約27cm、深さ約32cmが残存していた。内部からは、瓦器椀の底部片が出土している。40は復元底径7.2cmで、高さ6mm程の高台が貼り付けられている。器表が磨滅しているため調整は不明瞭だが、内面にはナデの後にミガキ、外面にはナデが施されているようである。

#### SP104（第16図）

SB229とSA232の間で検出した柱穴である。直径約30cm、深さ約41cmが残存していた。内部から土師質鍋の口縁部片が出土した。41は小片のため口径等の復元はできなかった。直立する口縁に断面方形形状の突帯が貼り付けられている。外面はナデ後にわずかにハケメ、内面は横方向のハケメが残っている。

#### SP130（第16図）

SK133の西側約1.2mで検出した柱穴である。直径約37cmで、内部から土師器の杯等が出土した。42は土師器の杯であり、復元口径15.1cm、復元底径11.0cm、器高2.5cmである。内外面に回転ナデが施されており、底面には回転糸切後の板状圧痕が残る。

#### SP139（第16図）

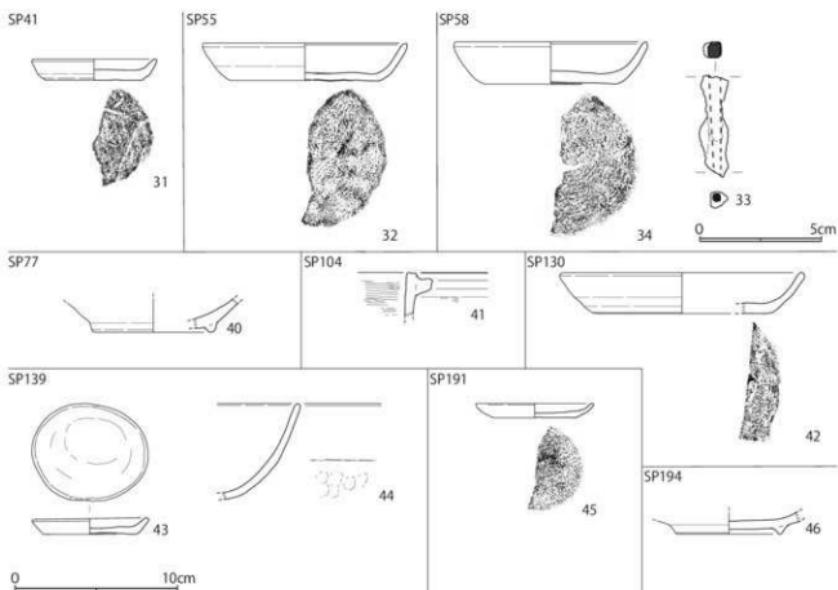
SD20の東側約3.5mで検出した柱穴である。直径約35cmで、内部から土師器小皿の完形品と瓦器椀が出土した。

43は土師器の小皿である。平面形が梢円形を呈する。最大口径7.0cm、最大底径5.7cm、器高1.0cmである。外面口縁部には回転ナデが施されており、内面にはナデ、底面には回転糸切後の板状圧痕が残っている。

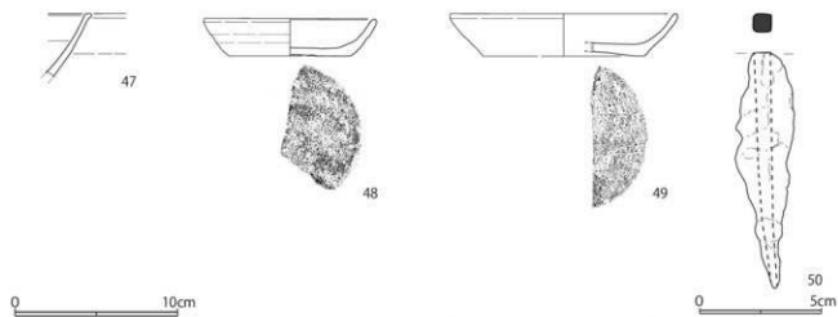
44は瓦器椀の口縁部片である。小片のため口径の復元はできなかった。器表により内外面の調整は不明な部分が大きいが、外面胴部下半に指頭圧痕と粘土の接合痕が残っている。

#### SP191（第16図）

SE150の北側約0.6mで検出した。長径約45cm、短径約23cmの梢円形状で、最深部で約39cmが残存している。内部から土師器の小皿が出土した。45は復元口径7.2cm、復元底径5.0cm、器高0.9cmである。内外面に回転ナデ、底面に回転糸切後の板状圧痕が残る。



第16図 柱穴 出土遺物実測図（土器：S=1/3、鉄器：S=1/2）



第17図 調査区内出土遺物実測図（土器：S=1/3、鉄器：S=1/2）

#### SP194（第 16 図）

調査区北東隅付近で検出した柱穴である。直径約 35cm で、内部から瓦器椀等が出土した。46 は瓦器椀の底部片である。復元底径 6.6cm で、高さ 5mm 程の高台が貼付けられている。内面にはナデ後のミガキ痕が、外面にはナデ痕がそれぞれ残る。

#### SP218（第 14 図）

SK71 の内部で検出した柱穴である。直径約 25cm、深さ約 24cm が残存している。内部から土師質鍋の口縁部が出土したが、小片のため実測ができなかった。鍋の器形は SK71 から出土した 22 と類似しており、混入の可能性もある。

#### 【遺構以外からの出土遺物】（第 17 図）

47 は白磁椀の口縁部である。調査区の西壁Ⅱ層から出土した。小片であり口径の復元はできなかった。外反する口縁部を有しており白磁のV類<sup>(註2)</sup>か。内外面に施釉されている。

48 は鉄釘である。調査区北東隅の攪乱部分から出土した。残存長 9.7cm、で上端部は方形を呈するが、鋸で覆われているため詳細は不明である。

49 と 50 は土師器の杯である。49 は包含層から出土した。復元口径 10.6cm、復元底径 7.8cm、器高 2.8cm である。器表が風化により荒れており、調整は不明であるが、底面にはわずかに回転糸切痕が残る。50 は SK133 北側拡張部のⅢ層から出土した。復元口径 14.0cm、復元底径 10.0cm、器高 2.6cm である。内外面に回転ナデが施されており、底面には回転糸切痕が残る。

第2表(1) 清水寺境内遺跡 出土土器類解説表 ※( )内は復元値

遺物 番号	出土位置	器種	法量		胎土	焼成	色調	形態の特徴	調査	文様・彩色	備考
			口径	底径							
2	ST22	土器 碗	16.0	(5.0)	5.9～ 6.0	角四石 石英	良好	N8/～4/灰白～灰	貼付け高台	外：ナデヨコナデ 指オ サ工後ミガキ	豐前町瓦窯陶
4	ST23 南西 1層	土器 小皿	(8.8)	6.5	1.35	赤色粒子(多) 角四石 白色粒子 子	良好	7.5YR8/4 褐黃釉	底部に板状住痕 内：回転ナデ 回転系切り	内：回転ナデ	
5	ST23	土器 小皿	8.2	6.1	11.5	角四石 石英 赤色粒子	良好	外：7.5YR8/4 褐黃 内：5YR6/8～7.5YR7/6 釉	外：回転ナデ 内：回転ナデ	回転系切り	
6	ST23	土器 小皿	9.0	6.5	1.2～ 1.25	角四石 赤色粒子 白色粒子	良好	外：7.5YR7/6 稲 内：10YR8/2～5YR7/6 稲	底部に板状住痕 内：回転ナデ	外：回転ナデ 内：回転ナデ	回転系切り
7	ST23	土器 小皿	(8.8)	6.1	0.9	赤色粒子 石英	良好	外：5YR8/6～10YR8/1 稲 内：5YR6/6～10YR8/1 稲 ～灰白	外：回転ナデ 内：回転ナデ	ナデ	
9	SP97	土器 皿×杯	(16.0)	(12.4)	2.8	角四石(多) 白色粒子 赤色粒子	良好	外：10YR8/4～5YR7/4 稲 内：10YR8/4 褐黃釉	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	回転系切離 し	
10	SP97	土器 杯	—	—	2.3	角四石(多) 石英 赤色粒子	良好	5YR5/6 前水闇	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	回転系切離	
11	SP148	土器 杯	(10.6)	(7.4)	1.9	角四石 石英	良	外：10YR8/3～2.5YR7/4 内：淡赤釉～淡水闇	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	回転系切り	
12	SE150	土器 小皿	—	—	0.9～ 1.0	赤色粒子(多) 角四石 石英	良好	外：7.5YR8/4 褐黃 内：5.5YR7/6 稲	底部に板状住痕 内：回転ナデ	風化の為器表面が荒 れている	
13	SE150	土器 東播磨系鉢	—	—	—	白色粒子	良好	外：N4/4～N7/灰 内：N7/灰白	内：回転ナデ	回転ナデ	

第2表(2) 清水寺境内遺跡 出土土器観察表 ※( )内は復元値

15	SK150 三層 皿	瓦器 椀	16.1 6.2	7.0 5.7~ 角觸石 石英	白色粒子 不良	外：5W/7.76 ~ 7.5W/3.2 内：黒 外：白~黄 内：黄~黄	貼付け高台 貼付け高台	外：ナデ ヨコナデ 内：ナデ ヨコナデ	指サ工後ナデ 指サ工後ナデ
16	SK150 三層 皿	瓦器 椀	(14.8) 4.6	5.3 角觸石 子	白色粒 子	外：N8/ ~ N6/ 外：N6/ ~灰 内：N6/ ~灰	ミガキは全体に施 されてしまったと思わ れる	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ ミガキ 内：ナデ	指サ工後 指サ工後
17	SK150 三層 小皿	土師器 皿	—	—	1.2 赤色粒子 石英	角觸 石英	外：7.5W/7.6 ~ 8.4 内：黄 外：7.5W/7.6 ~ 8.4 内：黄 外：7.5W/7.6 粒	貼付け高台 貼付け高台	外：回転ナデ 内：回転ナデ 回転系切り 削し
22	S711 張	土師質 張	(51.0)	—	—	角觸石 石英	長石 赤色粒子 石英	外：10YR4/2 ~ 8.2 内：白 外：10YR4/2 ~ 8.2 内：白	ヨコナデ
24	SK133 小皿	土師器 皿	7.2	5.6 角觸石 多	0.9 赤色粒子 石	角觸石 赤色粒子 石	外：7.5W/7.6 ~ 2.5Y6.1 内：黄 外：10YR7/4 ~ 5Y4/1 内：黄 外：10YR7/4 ~ 5Y4/1 内：黄 外：10YR7/4 ~ 5Y4/1 内：黄 外：10YR7/4 ~ 5Y4/1 内：黄	貼付け高台 貼付け高台	外：回転ナデ 内：回転ナデ 回転系切り 削し
25	SK133 杯	土師器 杯	(12.8) (9.2)	2.0 角觸石	2.0 赤色粒子 角觸石	長石 赤色粒子 石	外：7.5W/6 ~ 7.5Y8/4 内：黄 外：7.5W/6 ~ 7.5Y8/4 内：黄 外：7.5W/6 ~ 5Y4/1 内：黄	貼付け高台 貼付け高台	外：回転ナデ 内：回転ナデ 回転系切り 削し
26	SK133 圓筒陶器系 絲	圓筒陶器系 絲	—	—	—	石英 黑色粒子	良好 内：N6/1 ~ 3Y8/4 外：N6/1 白	回転ナデ	
27	SP98 皿	瓦器 椀×皿	11.4	5.2 角觸石 子	2.4~ 2.7	白色粒 子	やや 良	貼付け高台 貼付け高台	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ ナデ ナデ 指オ
28	SP48 杯	土師器 杯	—	(7.8)	—	角觸石 赤色粒子 石	5Y6/6 粒色	貼付け高台 貼付け高台	外：回転ナデ 内：回転ナデ 回転系切り 削し
29	SP57 小皿	土師器 皿	(6.8)	(4.8)	0.9 角觸石 赤色粒子 石	良好 赤色 粒子	外：7.5NP/7/4 ~ 5Y6/6 内：10YR7/3 ~ 5Y6/6 内：黄 外：7.5NP/7/4 ~ 5Y6/6 内：10YR7/3 ~ 5Y6/6 内：黄	貼付け高台 貼付け高台	外：回転ナデ 内：回転ナデ 回転系切り 削し
30	SP64 小皿	土師器 皿	(7.6)	5.4 角觸石 子	1.2	角觸石 赤色粒子 石	良好 内：10YR8/3 ~ 8/4 外：10YR8/3 ~ 8/4 内：黄 内：黄	貼付け高台 貼付け高台	外：回転ナデ 内：回転ナデ 回転系切り 削し
31	SP41 小皿	土師器 皿	(6.0)	1.3 角觸石 白色粒子	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ ヨコナデ 内：ナデ	ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ ナデ

第2表(3) 清水寺境内遺跡 出土土器類整理表

32	SP55	土陶器 杯	(12.5)	(9.2)	2.3 角閃石(多) 石英 白色 粒子	長 良好 外：5YR6/8～10YR7/2 内：5YR6/8～7.5YR7/6 褐色	底部板状鉢 器面風化の為焼れ ていている	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ 回転系切り
34	SP58	土陶器 杯	(11.8)	(8.0)	2.6 角閃石(多) 石英 白色 粒子	長 良好 外：5YR4/2～5YR5/6 内：5YR4/3～5YR5/6 外：5YR6/4～7/1 内：5YR5/1～7.5YR7/4 褐色 小量	底部板状鉢 器面風化により荒 れてている 外：ヨコナデ 内：ヨコナデ ナデ 回転系切り	
35	SP73	土陶器 小皿	6.85	4.2	1.3 角閃石(多) 石英 白色 粒子	長 良好 外：5YR6/4～7/1 内：5YR5/1～7.5YR7/4 褐色 小量	底部板状鉢 器面に板状鉢 付：明示無 外：ヨコナデ 内：ヨコナデ ナデ 回転系切り	
36	SP74	土陶器 杯	11.8	8.0	2.2～ 2.8 角閃石 石英	長 良好 外：5YR7/6～10YR7/4 内：5YR7/6 にぶ、黄緑	底部板状鉢 器面に板状鉢 付：明示無 外：ヨコナデ 内：ヨコナデ 回転系切り	
37	SP74	土陶器 杯	—	9.0	— 角閃石(多) 石英 白色 粒子	長 良好 外：10YR8/3～3/4 内：10YR8/1～5/1 灰白～ 褐色	底部板状鉢 器面が風化の為荒 れていている 外：ヨコナデ 内：ヨコナデ 回転系切り	
38	SP74	土陶器 小皿	7.8	5.5	0.9～ 1.4 角閃石 石英 白色 粒子	長 良好 外：5YR6/8～2.5YR3/1 内：5YR6/8～10YR8/3 褐色～ 黄緑	底部板状鉢 底部に板状鉢 付：明示無 外：ヨコナデ 内：ヨコナデ 回転系切り	
39	SP74	土陶器 小皿	7.1	5.9	1.1 角閃石(多) 石英 長石 赤色 粒子(少)	長 良好 外：5YR5/8 内：5YR6/8～10YR8/3 褐色～ 黄緑	底部板状鉢 底部に板状鉢 付：明示無 外：ヨコナデ 内：ヨコナデ 回転系切り	
40	SP77	土陶器 碗	—	(7.2)	— 精製土	長 良好 外：10YR8/2～8/3 内：10YR8/2 灰白	底部板状 粘付高台 外：ナデ 内：ナデ後、ケ目 ナデ 回転系切り	
41	SP104	土陶質 鍋	—	—	— 角閃石 石英	長 良好 外：5YR5/8 内：5YR8/8 灰白	底部板状鉢 外：ナデ 内：ナデ後、ケ目 ナデ 回転系切り	
42	SP130	土陶器 杯	(15.1)	(11.0)	2.5 角閃石(多) 石英 赤色 粒子	長 良好 外：5YR7/6 内：5YR7/6 褐色	底部板状鉢 外：ヨコナデ 内：ヨコナデ 回転系切り	
43	SP139	土陶器 小皿	7.0	5.7	0.9～ 1.0 角閃石 赤色 粒子(多) 長石 石英	長 良好 外：7.5YR 内：7.5YR7/6 褐色	底部板状鉢 外：ヨコナデ 内：ヨコナデ 回転系切り	

第2表(4) 清水寺境内遺跡 出土土器觀察表 ※( )内は復元値

44	SP139	瓦器 碗	—	—	—	良好	外：10YR8.4～5YR8.2 内：10YR8.1～5YR8.1 灰白 底面：灰白 内：10YR8.1 灰白	外：風化の為調整不困難 内：風化の為調整不困難 指サエ工後ナデ 風化の為調整不困難 内：風化の為調整不困難 底部に板状圧痕	口縁部スス付着 外：風化の為調整不困難 内：風化の為調整不困難 指サエ工後ナデ 風化の為調整不困難 内：風化の為調整不困難 底部に板状圧痕
45	SP191	土器 小皿	(7.2)	(5.0)	0.9	角圓石(多) 石英	良好	5YR5/8灰青褐色	外：回転ナデ 内：回転ナデ ナデ
46	SP194	土器 碗	—	(6.6)	—	角圓石 黑色粒子 子	良好	外：2.5YR8.1灰白 内：2.5YR7.1灰白	貼付高台 外：ナデ 内：ナデミガキ
49	調査区北東 包含層	土器 杯	(10.6)	(7.8)	2.8	角圓石 赤色粒子 長石	良好	5YR6/6～5Y1 暗一灰灰 色不規則	器面削減により調 整不困難 内：調整不困難
50	調査区中央 張張捺血焼 杯	土器 杯	(14.0)	(10.0)	2.6	角圓石(多) 色粒子 長石	良好	外：10YR8.2～8Y3 灰白～ 浅黃褐 内：10YR8.3浅黃褐	外：ヨコナデ 内：ナデ ヨコナデ

第3表 清水寺境内遺跡 出土陶磁器觀察表 ※( )内は復元値

遺物 番号	出土位置	器種	法量			成形	文様	裝飾等	製作地	製作年代	備考
			口径	底径	器高						
3	S123	白磁 碗	15.8	6.7	6.2	施釉	—	—	中国	13～14世 紀	大字有田窑 部下半の窯体部に斜面頭の工具類 あり
18	SD20	碗?	—	(5.5)	—	施釉	—	—	日本	近世?	—
50	調査区南端 II層	白磁	—	—	—	施釉	—	—	中国	—	大字有田窑 部V層?

第4表 清水寺境内遺跡 出土石製品觀察表

遺物 番号	出土位置	種類	法量			石材	特徴	年代	備考
			高	幅	厚				
14	SE150 1層	不明	3.6	3.8	1.4	滑石	全表面に加工痕がみられる。		
20	SK31	石製品 町石	16.5	4.25	11.6	安山岩	中央部にクボミがあり。 一部焼熱も認められる。 つくばいか		

第5表 清水寺境内遺跡 出土金属器觀察表 ※( )内は残存値

遺物 番号	出土位置	種類	法量			材質	特徴	年代	備考
			長さ	幅	厚さ				
1S122	鉢刀					鉄			頭に覆われており形状不明。大部分欠損。
1S020	鍛製品 ヤリガンナ?	(5.2)	2.7	2.1					頭に覆われており形状不明。上端に直径1cm程の凹凸がある。
23SK71	鍛製品 ヤリガンナ?	(6.1)	(2.5)	(1.0)		鍛造品			頭に覆われており形状不明。頭部が鋒している。
33SP58	鍛製品 釘	(4.1)	0.5	0.4			断面方形の釘頭と考えられる		
48調査区北東隅鍛製品 カクラン	釘	(9.7)	0.75	0.7			断面方形の釘頭と考えられる		頭に覆われており頭部な形狀不明

## 第4章 まとめ

### 第1節 調査の成果

宇佐西部（清水地区）集落基盤整備事業に伴い、発掘調査を実施した。その結果、中世の土塙墓2基、掘立柱建物3基、井戸2基、溝2条、土坑6基、柱穴200基以上を検出した。以下では、遺跡の年代や性格について若干の考察を行う。

### 第2節 遺構の分布

調査区内では、北側に遺構が多く検出されている。その一方で、南側は非常に希薄であることに加えて、検出された遺構はいずれも20cm程度しか残存していない。加えて、検出面までの堆積層が北側では1m近くあるのに対して、南側では60cm程度である。これらのことから、後世の開発で南側の土を削って、北側に盛土を行った事がうかがえる。南側の大部分の遺構は削平され消滅した可能性が高い。

### 第3節 出土遺物の検討

ここでは、遺跡から出土した外来系遺物と在地の瓦器及び土師器（杯、皿）について検討する。なお、編年については、白磁は横田賢次郎氏と森田勉氏（横田・森田 1978。以下、大宰府編年）、東播系須恵器は池田征弘氏（池田編 1998。以下、神出編年）、瓦器及び土師器は小倉正五氏による論考（小倉 1984）をそれぞれ援用する。

#### （1） 外来系遺物

本遺跡から出土した外来系遺物としては、ST23及び調査区西壁出土の白磁椀（3、47）、SE150及びSK133出土の東播系須恵器鉢（13、26）、SE150出土の滑石製品（14）が出土した。

#### 【白磁】

ST23出土の3は玉縁口縁であり、内面に沈線状の段を有することから大宰府編年IV-1a類に該当する。26は包含層出土であり、小片のため判然としない部分が多いが口縁端部をやや平坦にすることからV類の可能性が考えられる。

#### 【東播系須恵器】

2点が出土したが、いずれも鉢の口縁部片である。妙楽寺経塚（宇佐市大字木内）の1号経塚から出土した鉢（第18図）と比較すると、口縁部がやや外傾し、端部が丸みを帯びている。神出編年によれば口縁部が外反する型式の方が後出することが述べられている（池田編前掲）。

妙楽寺経塚の造営時期は12世紀前半と推定されており（江藤編2009）、後述する瓦器の年代観と矛盾しない。

#### 【滑石製品】

SE150から出土した。小片であり器種の特定はできなかったが、残存する大部分に加工痕が残っており、二次利用品を廃棄した物と考えられる<sup>(註3)</sup>。

#### （2） 在地系遺物

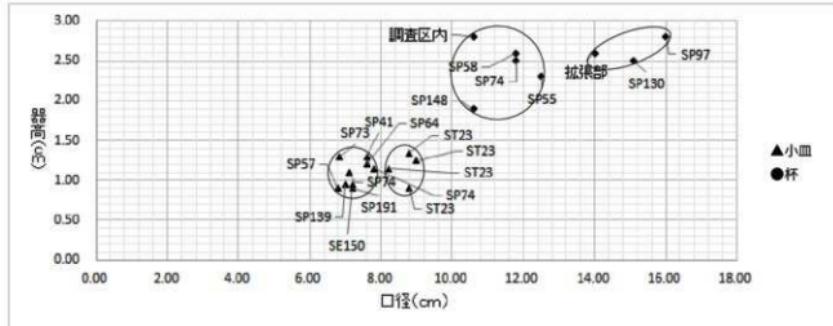
##### 【瓦器椀】

瓦器椀はST22・SE150・SK31等から出土した。いずれも豊前型瓦器椀と呼ばれるものである。宇佐地方の瓦器椀は時期を追うごとに高台が縮小し、同時に内外面のミガキ調整が行われなくなり粗雑化することなどを小倉正五氏が明らかにしている（小倉前掲）。

ST22出土の2は高台が約6mmある一方で、内外面にミガキが施されているといった点で比較的古い特徴を残しており、藤田遺跡（宇佐市大字南宇佐）のII型式が該当する。

一方、SE150出土15及び16やSK31の21は高台が5mm以下であり、ミガキが行われずには指頭圧痕がそのまま残っている等、藤田遺跡III型式で出現する特徴が認められる。SA232(SP98)から出土した27については市内での出土例が今のところ見当たらないが、器高が低く椀というより皿状であるが、高台が低くミガキ調整が認められない事などから比較的新しい時期に使用されたものと考えられる。

第6表 清水寺境内遺跡 出出土師器の口径と器高の比率分布及び一覧



遺物番号	遺構番号	層位	器種	口径	器高	底径	底面調整	備考
6	ST23		小皿	9.00	1.25	6.50	回転系切→板状圧痕	
4			小皿	8.80	1.35	6.50	回転系切	口径は復元値
7			小皿	8.80	0.90	6.10	回転系切	口径は復元値
5			小皿	8.20	1.15	6.10	回転系切	
38	SP74		小皿	7.80	1.15	5.50	回転系切→板状圧痕	
39			小皿	7.10	1.10	5.90	回転系切→板状圧痕	
31	SP41		小皿	7.60	1.30	6.00	回転系切	
30	SA234 (SP64)		小皿	7.60	1.20	5.40	回転系切→板状圧痕	口径は復元値
12	SE150	上面	小皿	7.20	0.95	5.80	回転系切→板状圧痕	
45	SP191		小皿	7.20	0.90	5.00	回転系切→板状圧痕	
43	SP139		小皿	7.00	0.95	5.70	回転系切→板状圧痕	
35	SP73		小皿	6.85	1.30	4.20	回転系切→板状圧痕	
29	SP57		小皿	6.80	0.90	4.80	回転系切	口径、底径は復元値
10	SB229 (SP97)		杯	16.00	2.80	12.40	回転系切	口径、底径は復元値
16	SP130		杯	15.10	2.50	11.00	回転系切→板状圧痕	口径、底径は復元値
50	III層		杯	14.00	2.60	10.00	回転系切	口径、底径は復元値
32			杯	12.50	2.30	9.20	回転系切→板状圧痕	
34	SP58		杯	11.80	2.60	8.00	回転系切	口径、底径は復元値
39	SP74		杯	11.80	2.50	8.00	回転系切→板状圧痕	



第18図 東播系須恵器（鉢）の比較

### 【土師器 小皿・杯】

第6表は本遺跡から出土した土師器の口径と器高の比率を分布図及びその一覧である。口径及び器高が復元できるものを対象とした。

小皿では、13個体を対象とした。口径8cmを境として2つに分けられる。口径8cmを超えるものはすべてST23出土である。

杯は8個体を対象とした。個体数が少ないためやや不明瞭であるが、口径13cmを境に2つに分類できそうである。

古代から中世前半にかけて、土師器は次第に小型化することが小倉氏や宮内克己氏により明らかにされている（宮内 1989、ほか）。

前掲した小倉氏の論考では瓦器椀と土師器の併行関係も検討されており、瓦器椀が粗雑化する画期と土師器が小型化する画期が概ね一致することが示されている。また、実年代については、藤田II型式が12世紀末から13世紀前半、同III型式が13世紀後半から14世紀前半として推定されている。

#### 第4節 遺跡の年代と特徴

清水寺境内遺跡の年代は、上記のとおり出土遺物から大きく2つの時期に分けられる。各時期の遺構は下記および第7表のとおりである。

1期は12世紀後半から13世紀前半であり、ST22・ST23・SB229が該当する。調査区の南側に他の遺構が存在した可能性も否定できないが、前述のとおり後世の削平を受けており判然としない。

2期は13世紀後半から14世紀前半であり、SE150・SA232・SA234・SK133等が該当する。調査区の北側に集中する傾向がある。SB229を開く様に柵が築かれていることから、この時期も継続的に住居が使われていた可能性は高い。また、ヤリガンナ状の鉄器やつくばい状石製品などが出土していることから、一定の知識階級に属する者が居住するための空間が築かれていたことがうかがえる。

なお、清水寺の縁起には、平安時代末にあたる治承4(1181)年に小松内府重盛の命により清水寺の七堂伽藍が整備されて寺院が再興されたと記されている(小野1931)。ST22やST23の年代は寺院の再興期と概ね一致している。今回発見された遺構は、清水寺再興の関係者、あるいは再興後の僧侶らが生活した僧坊であった可能性も考えられる。

第7表 清水寺境内遺跡 各時期の遺構

実年代	時期	瓦器編年 (小倉1984)	遺構	備考
12C後半 ～13C前半	清水寺境内1期	藤田II型式	ST22、ST23、SB229	
13C後半 ～14C前半	清水寺境内2期	藤田III型式	SB230?、SB231、SE150、SK31、SK133、SA232、SA234、SP41、SP55、SP58、SP73、SP74、SP77、SP130、SP139、SP191、SP194	SB229はこの時期も存続か?

#### 注釈

註1 横田賢次郎・森田勉 1978の分類による。

註2 同上

註3 滑石製品の実測及び拓本については、柴田亮氏(大村市教育委員会)にご教示をいただいた。

#### 参考文献

池田征弘(編) 1998『神出窯跡群』兵庫県教育委員会

江藤和幸(編) 2009『妙楽寺絆塚』宇佐市教育委員会

小倉正五 1984「宇佐地方の瓦器椀について」『古文化談叢』14pp.57-72 九州古文化研究会

小野精一 1931「第二節 古利の縁起」『大字佐都史論』pp.676-685

後藤一重 2003「八坂久保田遺跡・八坂本庄遺跡・八坂中遺跡の出土土器について」『八坂の遺跡Ⅲ』pp.1-25 大分県教育委員会

宮内克己 1984「宇佐宮弥勒寺出土の土師器」『古文化談叢』14pp.43-55 九州古文化研究会

宮内克己 1989「3. 出土土器の編年」「弥勒寺」pp.186-194 大分県立風土記の丘歴史民俗資料館

横田賢次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 pp.1-26 九州歴史資料館

# 写 真 図 版



清水寺境内遺跡 調査区西側 遺構検出状況（北から）



清水寺境内遺跡 調査区東側 遺構検出状況（北西から）



清水寺境内遺跡 調査区西側 完掘状況（北西から）



清水寺境内遺跡 調査区東側 完掘状況（北から）

PL. 3



清水地区試掘調査 1TR 完掘状況



清水地区試掘調査 6TR 完掘状況



清水地区試掘調査 7TR 完掘状況



清水地区試掘調査 8TR 完掘状況



清水地区試掘調査 9TR 完掘状況



清水地区試掘調査 13TR 完掘状況



清水地区試掘調査 16TR 完掘状況



清水地区試掘調査 19TR 完掘状況



ST22 遺構検出状況（南から）



ST22 遺物出土状況 全景（北から）



ST22 遺物出土状況 近接（北から）



ST22 土層断面（北から）



ST23 遺構検出状況（南から）



ST23 遺物出土状況 全景（西から）



ST23 遺物出土状況 近接（西から）



ST23 完掘状況（西から）



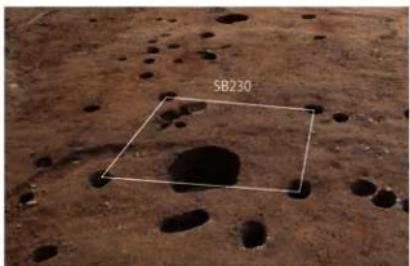
SE150 遺構検出状況（北西から）



SE150 半截状況（北から）



SE150 土層断面（北から）



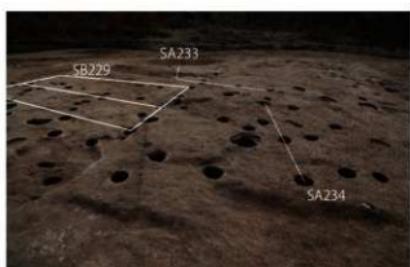
SE150、SB230 完掘状況（北から）



SP232 検出状況（北西から）



SP98 遺物出土状況（北西から）



SB229、他 完掘状況（北西から）



SD20 完掘状況（北から）



SK31 遺構検出状況（北から）



SK31 完掘状況（北から）



SK71、SP74 遺物出土状況（西から）



SK71 遺物出土状況 全景（西から）



SK71 遺物出土状況 近接（西から）



SP73、SP74 遺物出土状況（東から）



SP73 遺物出土状況（東から）



SP74 遺物出土状況（南から）



1 (ST22)



2 (ST22)



3 (ST23)



4 (ST23)



5 (ST23)



6 (ST23)



7 (ST23)



8 (ST23)



9 (SB229)



10 (SB229)



11 (SB231)



12 (SE150)



13 (SE150)



14 (SE150)



15 (SE150)



16 (SE150)



17 (SE150)



18 (SD20)



19 (SD20)



22 (SK71)



20 (SK31)



21 (SK31)



23 (SK71)



24 (SK133)



25 (SK133)



26 (SK133)



28 (SA234)



29 (SA234)



30 (SA234)



27 (SA232)



31 (SP41)



32 (SP55)



33 (SP58)



34 (SP58)



35 (SP73)



36 (SP74)



37 (SP74)



38 (SP74)



39 (SP74)



40 (SP77)



41 (SP104)



42 (SP130)



43 (SP139)



44 (SP139)



45 (SP191)



46 (SP194)



47 (包含層)



48 (包含層)



49 (包含層)



50 (包含層)

## 報告書抄録

ふりがな	せいせいじけいだいいせき						
書名	清水寺境内遺跡						
副書名	宇佐西部（清水）地区集落基盤整備事業に伴う発掘調査成果報告書						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	弘中正芳						
編著機関	宇佐市教育委員会						
所在地	〒 879-0492 大分県宇佐市大字上田 1030 番地の1						
発行年月日	西暦 2019年3月12日						
ふりがな	ふりがな	コード					
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積
清水寺境内 遺跡	大分県宇佐市 大字清水 456 番地、 同 458 番地	211	350	33° 32' 14"	131° 15' 25"	20161209 ～ 20170117	1425m <sup>2</sup> 集落基盤整備に伴う開発行為
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
清水寺境内 遺跡	集落、 墓	中世	土壙墓2基、 掘立柱建物3基、 井戸2基、溝1条、 土壙6基、柵4基、 柱穴多数	鉄刀、瓦器、白磁、 土師器、釘、石製品、他			

平成 31 年 2 月 15 日印刷

平成 31 年 3 月 12 日発行

## 清水寺境内遺跡

宇佐西部（清水）地区集落基盤整備に伴う発掘調査成果報告書

発 行 宇佐市教育委員会

〒 879-0492

大分県宇佐市大字上田 1030 番地の 1

印 刷 有限会社渡辺印刷

〒 879-0444

大分県宇佐市石田 132 番地の 2



